

となり合う〈遠き〉アジア講演シリーズ

Changing Landscape of Asian Studies: a view from the US with emphasis on Southeast Asian Studies

報告 青山亨

講演者：トンチャイ・ウイニツチャクン（ウイスコンシン大学）

トンチャイ・ウイニツチャクン氏は、アメリカ在住のタイ出身の歴史家である。一九九四年に刊行された代表作 *Siam Mapped: A History of the Geo-body of a Nation* は、タイのナショナルリズムの形成を、国境線を記載する地図作成の変遷から読み解いた画期的な作品である。本作は、『想像の共同体』の著者で、奇しくも去る一月一二日に急逝した政治学者ベネディクト・アンダーソンが高く評価した作品であり、日本語訳『地図がつくったタイ——国民国家誕生の歴史』（石井米雄訳、二〇〇三年、明石書店）は第十六回アジア・太平洋賞大賞を受賞している。ウイスコンシン大学の教授として歴史学を講じており、二〇一三年には全米アジア学会の会長を務めている。アジアを相対化する視点をもったアジア人であるトンチャイ氏の講演は、本研究所が開催する「となり合う〈遠き〉アジア講演シリーズ」の第一回を飾るに相応しいものであったと言えよう。折良くトンチャイ氏は京都大学東南アジア研究所の客員研究員として日本に滞在中であり、今回の講演は、トンチャイ氏の来京の機会を活かして、総合文化研究所と東南アジア学会との共催で開かれたものである。

英語で行われた今回の講演のタイトルは、「アメリカ合衆国から見た、変わりゆくアジア研究の風景」と訳すことができる。以下、その要点を私なりに書き留めておきたい。

欧米のアジア研究の伝統は、ヨーロッパの植民地支配から生まれた「東洋学」と冷戦期アメリカの「地域研究」の二つの流れによって形作られてきた。しかし、近年、欧米におけるアジア研究を取り巻く状況は根本的に変わってしまった。具体的には、東洋が西洋に対置される他者として構築されてきたことへの鋭い批判、欧米のアジア研究の場におけるアジア出身研究者の急速な増加、高等教育およびグローバルな知的活動における「アジアの台頭」、そして学術研究におけるナショナルリズムの衰退をあげることができる。このような背景から、二つの重要な変化が起こった。第一に、アジアという空間概念の再定義であり、第二に、アジア研究の現場のアジア諸国およびアジア間ネットワークへのシフトである。

このような状況において、「地域研究」は時代遅れになっているのだろうか？ たしかに、地域研究のアプローチには再考が必要となっている。しかし、地域研究に対するこれまでの批判は、「地域に基づいた研究」を放棄することを意味しないし、定量的ないわゆる「科学的」な知識でもって地域に基づいた知

識を置き換えるようなことがあつてはならない。なぜなら、両者は異なった種類の知識であり、相互に置き換えることは不可能だからである。

現在、東南アジア研究では、東南アジア諸国における東南アジア研究の進展、その中での独自の東南アジア研究の推進（例えばシンガポール）、従来の地域の枠組みを超えた東南アジア研究の試み（大衆文化、宗教研究などのテーマ）、「東南アジア」という概念自体の多様化（テーマとしてのネーションはいまだ優勢だが減衰しつつある）、地理的範囲としての東南アジアの多様化（例えば、海域世界論、ゾミア論など）、といった諸傾向が進行している。

それでは、このように変化し多様化するアジア研究にどう対応すればよいのだろうか？ 二つの喫緊の課題がある。第一に、アジア研究を行う研究者の環境の違いを理解する必要性であり、第二に、言語の制約とディシプリンの境界を越えた研究者ネットワーク形成のための言語の重要性と学術的翻訳の重要性である。

最後に、これらの視点から現状を振り返ると、日本におけるアジア研究の特徴として、欧米のアジア研究の直接的な影響になかった一方で、中国研究の伝統を継いだ東洋学、「南洋研究」の遺産、アメリカの地域研究の影響という、少なくとも三つの学問的系譜を見いだすことができる。また、翻訳を通じて海外の学界動向との繋がりが強い点も他のアジア諸国に見られない特徴である。日本以外のアジア諸国におけるアジア研究の特徴としては、植民地期高等教育の遺産として政府政策の補完機能が強いこと、そのため、社会科学は政策志向で応用分野

に偏ること、相対的に人文学に弱い傾向があること、があげられる。加えて、現地語中心の研究環境の場合（例えば、タイ、インドネシア）、自己完結的であり、英語を主力とする研究環境の場合（例えば、マレーシア、シンガポール、フィリピン、インド）、固有の条件や歴史に制約を受ける傾向がある。

以上が、トンチャイ氏の講演の要点である。東南アジア研究を中心に行っているが、アジア研究の全体を射程に入れた大局観の思いが伝わる講演であった。講演には本研究所の会議室を使ったが、外国人研究者や留学生も集まって満席となり、椅子を追加しなければならぬほどであった。小柄な体からエネルギーあふれるトンチャイ氏の話しぶりでも、講演は終始変わることなくインフォーマルな雰囲気で行われた。講演後にも活発な質疑応答が行われ、時間が限られていたのが惜しまれるほどであった。閉会後は場所を変えてトンチャイ氏を囲んだ懇親会を開いたが、ここでもトンチャイ氏の打ち解けた中にも真摯な人柄が知られた。今後もこの講演シリーズが継続されることを期待して、充実した一日を終えることができた。

